

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

⑩『イグアナの娘』

迫 共
(浜松学院大学)

萩尾望都さんの作品には社会福祉や対人援助を考えるのにヒントとなる作品がたくさんあります。今回は短編の名作「イグアナの娘」を紹介します。わずか50ページの作品ですが、テレビドラマ化されたこともあり、よく知られたお話だと思います。

主人公はふたり姉妹の姉、青島リカ。母親のゆりこは、リカの出産直後からリカが醜いイグアナのように見えてしまい、パニックになってしまいます。「うそ！うそ！ 違う、トカゲだわ！」

ちなみにイグアナは爬虫類の一種で巨大なトカゲのような姿をしています。生まれたての赤ちゃんがお猿や宇宙人のように見えるという話はよく聞きますが、イグアナとは…。夫は「マタニティ・ブルーか？」と心配します。夫だけでなく、周りの人には普通の可愛い赤ちゃんにしか見えません。

ゆりこには長女のリカがイグアナに見えて、どうしても愛することができません。なのに、次女のマミは、普通のかわいい女の子に見えます。ゆりこはマミを溺愛する一方で、リカには冷たく、厳しく接することになります。写真には普通の人間の子どもとして映っているのが、ゆりこには不思議でなりません。

「マミと比べてリカをけなすなよ」とたしなめる夫に、ゆりこは泣きながら「リカはまるでガラパゴスのイグアナよ」と口走ります。リカは寝室のドアごしに聞いてしまいました。

翌日、母親の化粧道具を使おうとしているところを見つかったリカは、思わず問いかけます。「ママ、わたしイグアナだからみにくいのか？」 ゆりこはひきつりながら「イグアナなんて二度といっちゃいけません！」と叱りつけます。

授業中、落ち着きがないリカですが、担任は学級訪問の際、ゆりこにリカの成績の優秀さ

を伝えます。「IQテストは全校一でしたから、落ち着いて勉強すれば成績あがると思うんですがね...」。ゆりこは「リカって頭いいの？ マミちゃんよりも？」と驚くとともに、「イグアナのくせに...まあ、なまいき！！」と怒ってしまいます。

ゆりこの誕生日に90点台のテストを見せたリカは、「なんで全部100点じゃないの！」と叱られます。「誕生日にこんなの見せられても嬉しくない」という母に、リカは、手鏡をプレゼントに贈りますが、今度は「ムダづかいばかりして！ お店に返してらっしゃい！」と責められます。あまりの理不尽さにリカは泣きながら「あたしがイグアナだからママはあたしがキライなんだ」と怒ってしまいます。

リカは自分でも自分をイグアナだと思うようになります。手鏡は川に投げ捨ててしまい、「神様が、イグアナと人間の、魂と体を入れちがえたのよ」「あたし大きくなったらガラパゴス諸島に行って、あたしの本当のお父さんとお母さんを探そう」と考えます。

リカは他人の目には美人に見えます。ですが本人はずっと自分をイグアナだと思っています。ラブレターをもらっても、からかわれているとしか思えません。

妹のマミは、ある日、進路指導で姉の大学の偏差値が高いことを知ります。「おねーちゃんてほんとは頭よかったの？ あたし、ずっとおねーちゃんのこと…グズだのブスだのバカにして…」。リカは「いいの。あたしはママのいうようにイグアナなんだから」と返します。マミが「おねーちゃんもいけないんだよ。そんなふうに自分でいじけて」と言いますが、リカは「いじけてないの。事実なの」とそっぽをむいて取り付く島もありません。

リカにはボーイフレンドができますが、イグアナである自分が彼を食い殺してしまう夢を見てショックを受け、別れを決心します。「一生、恋愛なんてできない」と悲しんでいた時、巨漢の牛山と出会い、彼なら食いついてもケガひとつしなさそうだと安心感をもちます。

リカは大学卒業とともに牛山と結婚。親元を離れて札幌で暮らすことになります。

盆にも正月にも地元には帰らず、リカは幸せな生活を過ごします。子どもが生まれた矢先、実家からの連絡が入ります。

母のゆりこが急死したのです。リカは帰省の道すがら「わたしホッとしてる。ちっとも悲しくない。悲しくないのがむしろショック。やっぱり冷血動物のイグアナなんだ！」と感じます。

実家に帰ると、冷たく横たわる母の顔には白い布がかけられています。親戚のおばさんから促されて顔を見ると、そこにはなんと、イグアナの顔をした母が眠っていました。

驚いて取り乱すリカ。「わ、わたしの顔にそっくりよ！」というとおばさんが返します。

「前から言ってたのよ オ　ゆりこちゃんとリカちゃんはよく似てるっていうと、ゆりこちゃんは怒ってたけど、やっぱり似てるわよねえ」…

リカは母の枕元で、ガラパゴスのイグアナ姫だった母を空想します。魔法使いのおばあさんに人間にしてもらい、「イグアナだったことなんて忘れて人間として生きるわ」と誓った母。それなのにイグアナの娘が生まれたために、絶対に正体を知られたくなかった母。「わたしを産んで、愛せなくて苦しかったでしょう」…

納骨をすませたリカは牛山とわが子のもとに帰ります。リカは赤ちゃんが母に似ているように見えて可愛く感じなかったのですが、空想のガラパゴスにいったとき、「何かが浄化された」と感じました。「あたしも苦しかった。母に好かれなくて、でも嫌われて。母を愛したくて、でも愛せなくて」「でももういい。あたしは夢でガラパゴス諸島に行って母にあった。あたしは涙とともにあたしの苦しみを流した」。そうして夫とわが子とともに木漏れ日の中を歩きながら、リカはどこかに母の涙の気配も感じとっています。

『イグアナの娘』のような寓話的な物語については様々な理解が可能です。ですが児童家庭福祉の立場からは、母子関係の問題を感じざるを得ません。

まず連想されるのは「虐待の連鎖」です。母ゆりこの育ちのエピソードは作品では描かれていませんが、ゆりこ自身が不適切な養育環境で育ち、認知の歪みをもっているようです。自分に似た娘のリカがイグアナに見えるのです。ゆりこは自尊感情の傷を自分では消化できず、その傷をなかつたことにして日常を送っているように思えます。心の傷をリカに投影するから、リカが醜いイグアナに見えるのでしょう。勉強ができるリカを喜ぶのではなく「なまいき」と感じてしまうのも認知の歪みを感じさせます。反面、マミは過度に理想的な娘と認知されています。

不適切な養育環境はリカの認知も歪ませます。「自分は醜いイグアナなんだ」という誤った信念を「事実なの」と言い切り、恋愛のチャンスも自分からつぶしてしまいます。リカの認知の歪みは、リカ自身が現実世界でもまれる中で、ゆっくりと回復していきます。作中では最後までリカはイグアナの姿で描かれます。他人の目から見たリカが人間に描かれているのはわずか数コマです。

結婚生活を送ることは、私達に生まれ育った原家族を客観的に見るチャンスを与えてくれます。リカは親元から離れて結婚生活を送ることで、さらに現実感覚を回復したのでしょう。亡くなった母の枕元で、リカは母が自分にそっくりな顔をしていたことに気づいて、驚きます。あれほどまでに自分を拒絶していた理由が、目の前に横たわっていたのです。

「虐待の連鎖」に翻弄される人がいることも事実ですが、断ち切ることもできます。赤ちゃんが母に似ているように感じるリカでしたが、イグアナの孫にはせずに済んだようです。

『イグアナの娘』は、設定を読み込んでみると実に恐ろしい物語ですが、作中にはそれに反してほのぼのとありふれた日常もふんだんに描かれています。実はこんな家庭は、私達の身近にたくさんあるし、私達自身の家庭も、実はリカの家とそう変わらないのかもしれないと気づかせられるのです。